

福知山市立惇明小学校所蔵資料 「丙申水害実況」・「明治四十年八九月惇明尋常高等小学校水害紀要」に見る 明治期の小学校の水害被害と復旧の経過

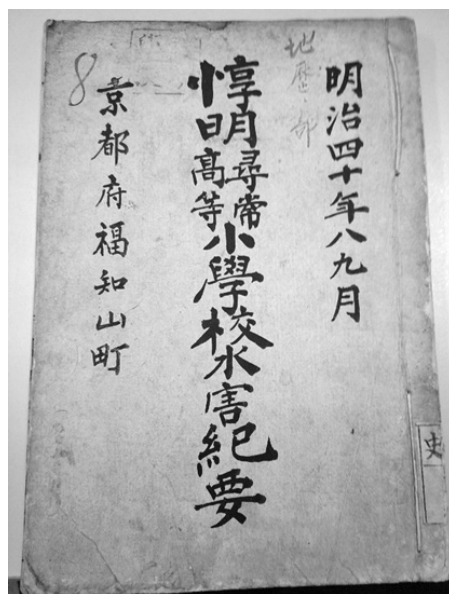
小滝 篤夫*

I はじめに

京都府福知山市立惇明小学校は、江戸時代の1809（文化9）年に開かれた福知山藩の藩校惇明館を母体として、1873（明治6）年に設立された¹⁾。校長室には明治時代にあった2回の大水害の被災記録が保管されている。手書きの稿本「丙申水害実況」（第1図）と「明治四十年八九月惇明尋常高等小学校水害紀要」（第2図）である。

学校及び関係者がまとめた被災記録は、例えば昭和10年の京都大水害を記録した京都市立上賀茂尋常高等小学校の「水禍」²⁾、昭和13年の阪神大水害を記録した甲南高等女学校の「甲南高女 水禍記念誌」³⁾、旧制甲南高校の「阪神地方水害記念帳」⁴⁾、あるいは各校の沿革史の中で災害記録を記載した例などがある。いずれも、児童・生徒、教職員の災害体験記から構成されている。

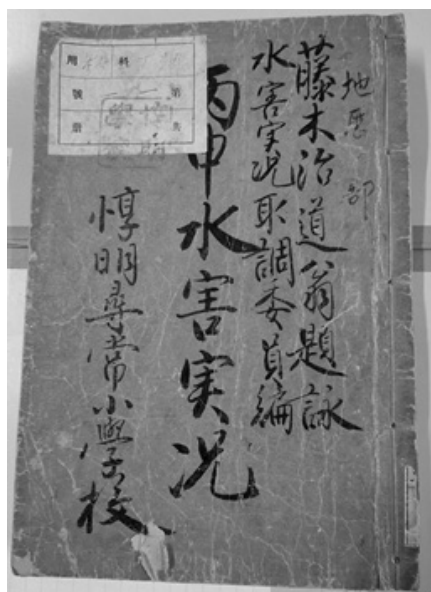
「丙申水害実況」は明治29年水害に関する希少な文



第2図 「明治四十年八九月惇明尋常高等小学校水害紀要」表紙

献として知られていて、由良川の水害史の研究である、芦田⁵⁾、由良川改修史編纂委員会⁶⁾、福知山市史編纂委員会⁷⁾小滝⁸⁾、西村⁹⁾などで、要約あるいは引用されている。しかし、この稿本の筆者が体験し記録した、学校や町の復旧の取り組みの紹介は少ない。「明治四十年八九月惇明尋常高等小学校水害紀要」は、学校が受けた被害の克明な記録と共に、被災後授業再開までの取り組みが日誌風に記録された文書で、学校復旧の経過がよくわかる。この史料が紹介や引用された例はない。両者ともに、執筆者の被災体験にとどまらず、復旧への取り組みを、当事者の目で克明に記録した文書であることが大きな特徴で、前記の被災記録とやや趣が異なっている。

本論では、この特徴に注目して、明治29年、40年の水害の状況と、被災後、学校が授業再開に至る経過と関係者の努力のあとを紹介する。



第1図 「丙申水害実況」毛筆書きの稿本表紙

* 京都府立大学非常勤講師

II 史料の概要

1. 「丙申水害実況」

著者は、手書き稿本では明らかにされていないが、のちに綴り方教育の大家となった芦田恵之助（1873年～1951年）で、明治28年から31年にかけて惇明尋常小学校に3年間勤務した教員である¹⁰⁾。明治29年8月の由良川水害の状況を詳しくかつ、情感豊かに描き、生活に根差した綴り方教育をめざす芦田の原点となった体験の記録である¹¹⁾。未曾有の生活体験を記録しておくことの重要性を痛感した芦田が、自身の体験と取材した内容を書き溜め、「水害実況取調委員編」として翌年の4月に清書を完了して、1冊を学校に、もう1冊を地元の名士に寄贈したものである¹²⁾。惇明小学校には現在、和紙に毛筆で行書書きした稿本（第1図）と、学校名入り罫紙にペンで楷書書きした稿本の2冊が保管されている。両者の内容は同じだが、毛筆書きの1冊は表紙に破れや、すれ傷があり、ペン書きの1冊には傷みがほとんどない。前者は図書室等で公開され、後者は保存用であったことがうかがえる。芦田の綴り方教育の業績が全集に編まれるにあたり、「丙申水害実況」は『芦田恵之助国語教育全集1明治期実践編』に翻刻・収録された¹³⁾。

2. 「明治四十年八月月惇明尋常高等小学校水害紀要」

学校名入りの罫紙に毛筆で楷書書きしたものである。筆者は明らかでないが当時の惇明尋常高等小学校の教員であることは間違いなさだろう。内容は多岐にわたるが、被災した施設・物品の名称・金額等の細かい記載から始まり、児童の健康診断結果のほか、「明治四十年八月水害日誌」の項では、水害当日から授業再開まで約4週間の毎日の天気、校内の出来事、校長以下教員の行動などを淡々と記している。最後に出席統計表が付されている。編纂の意図などは書かれていないが、おそらく学校日誌の一部として書かれたものや行政への提出書類を書き写すなどして綴じ、記録として保存したものであろう。広く読まれることは意識されていないようである。2冊保存されていて、うち1冊は内容が一部省略されている¹⁴⁾。以下では「明治40年惇明校水害紀要」と略す。

III 明治29年、40年水害による福知山の被害

1. 明治29年水害の概要

福知山市東部の観音寺（当時は天田郡西中筋村字観音寺）に残された文書¹⁵⁾によると、1896（明治29）年8月30日朝から降り始めた雨が午後には大雨となり、夕方には風も加わってきた。夜には大暴風雨になって村人が家に閉じこもっていた時に、轟音と共にケヤキの大木の幹が地上から3mほどの高さでへし折られ、寺の仁王門を倒壊させた。村内の大半の家が急激な増水によって浸水、家財道具を流失、田畑の損害も甚大であった。このような記述から、雨と共に風による被害も大きいことがわかり、明らかに台風による被害と考えられる。なお、台風（颱風）という語は明治43年頃から使われていて¹⁶⁾、明治29年にはなかったものである。

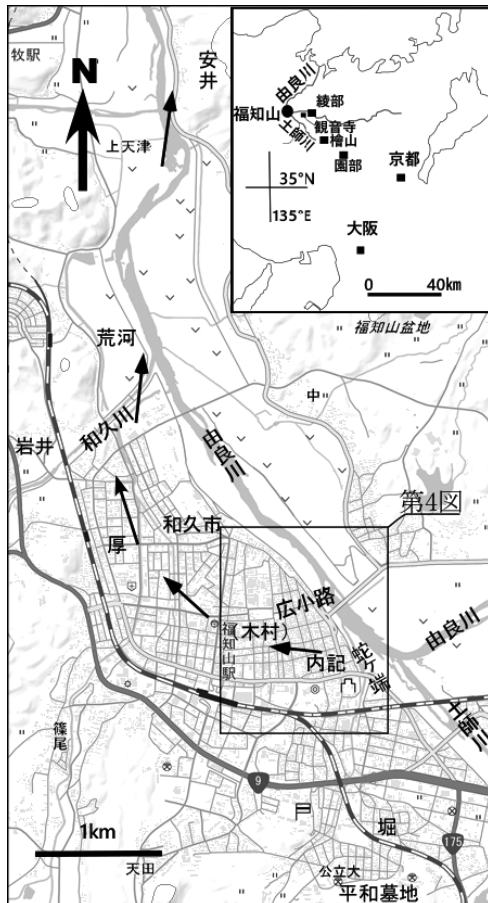
この水害の最も詳しい史料といえる「丙申水害実況」によって、福知山町の明治29年水害の概要を述べる。水害とその後の経過を第1表に示し、関係地名を第3図と第4図に記載した。

8月31日、午前2時頃に蛇ヶ端^{じよがはな}で堤防が決壊し、内記にあった惇明尋常小学校南方は濁流によって川のようになり、連隊区司令部¹⁷⁾と天田郡中部高等小学校は流失、収税署、有馬氏倉庫が激流中に辛うじて建っている、

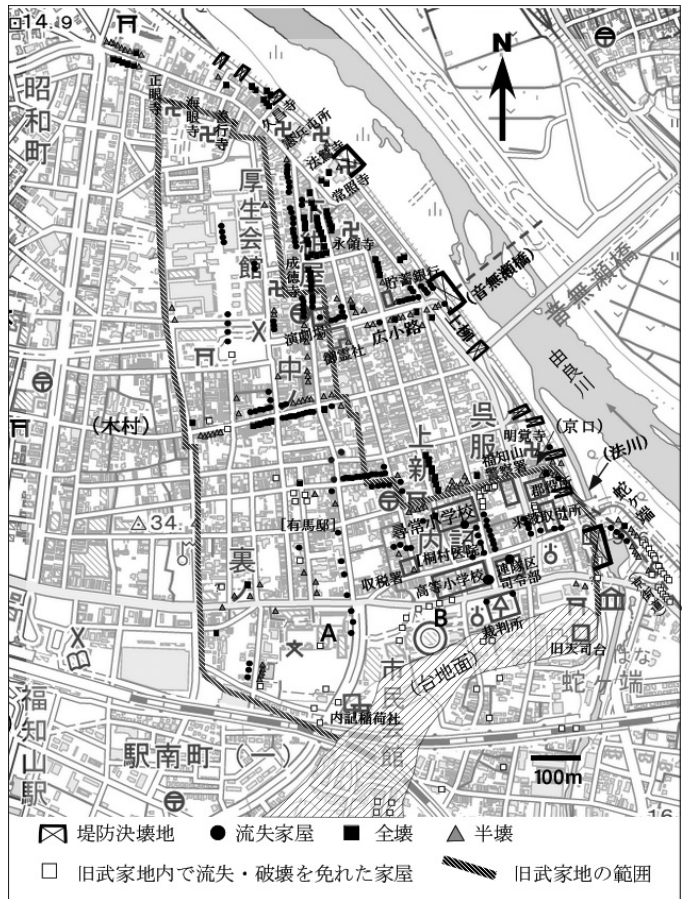
第1表 明治29年水害とその後の経過

8月30日	午前、北東の風強く、弱い雨。町民は不安。 正午頃 風雨強まる。 夕方、道路の通行が容易でない。 夜、西北の風強く豪雨。
31日	午前1時 小康状態 2時頃 堤防決壊、町中に激流が流れ込む。二階に達するまで僅に半時。 4時半頃 芦田はかろうじて隣家の屋根の上に避難。連隊区司令部、高等小学校はすでに流失。濁流に流される家屋多数。 10時頃 水位は最高位に達し、この後、低下。減水と共に家屋の倒壊始まる。 午後4時頃、水位は腰ほどの高さになる。 夕方、決壊した堤防から濁流が流れている。惇明校校内は家屋の残骸、遺体、衣類などが山積。流れ残った校舎の壁は壊れ、散乱する物で足の踏み場もない。
9月1日	町民に向けて炊出しが行われる。15日まで。
3日	水上郡の医師菊池敏樹、無料診察開始。
4日	赤十字社の無料診療。
13日	芦田らは京都へ支援を訴えに出張。10月8日まで。
17日	惇明尋常小学校は授業再開。

「丙申水害実況」による。



第3図 福知山周辺の関係地名
地理院地図上に本文中に出てくる地名と、推定される洪水流の向きを矢印で記入した。()内の地名は、現在消滅している。図中の枠内は第4図の範囲。



第4図 明治29年水害の被災地図

「明治廿九年八月三十一日京都府天田郡福知山町水害全地図」に記載された家屋の被害状況と破壊箇所を地理院地図に記入した。建物の名称は同図に記載されているものを記入し、旧武家地と町人地の境界は、同図に記された字の境界線をたどった。[]の名称は、「丙申水害実況」の記述から推定、()内は原図に記載がない地名。Aは明治36年に移転した惇明尋常小学校の位置、Bは明治29年水害で校舎流失後、明治31年に完成した天田郡中部高等小学校の位置を高橋(1993)によって記入した。地形の理解のために、城や武家屋敷に利用されていた台地の分布(現在は各所で削剥されている)を記入した。当時は由良川沿岸から旧武家地西端までが町内であった。

という状況になった(p. 22、『芦田恵之助国語教育全集1』のページを示す。以下、本節では同じ)。旧藩医の有馬康三郎氏一家や惇明校教員の寺田寛氏一家などは、避難していたわらぶき屋根ごと激流に流され、西方の木村から岩井に流され、荒河にたどり着いて救助された。有馬氏の家族はそこから北流して由良川対岸の安井にまで流されて救助された(p. 33-34, p. 71)。惇明校の南にあった医師桐村義堯氏一家とその医院職員・入院患者あわせて30余人は濁流に流されて亡くなった(p. 72)。

惇明尋常小学校は、当時、南北両教室棟と本館(講堂)が凹字型をなして18)、南教室棟は流失、本館と北教室棟が残った。北教室棟の北側には城下町時代の堀を利用した池があって、そこには犠牲者のほか、流失した屋根、家財道具、などがうずたかく残されていた(p. 24)。道路には倒壊した家の材木、家財道具などが山となって、通行もできない所が多くあった(p. 23)。家屋流失146戸、全壊119戸、半壊100戸、破損・傾斜558戸(p. 68)、人的被害は、惇明尋常小学校だけで、児童

が溺死18名、教員が溺死1名、関連病死1名であった(p. 33~44)¹⁹⁾。

この時の洪水水位は、福知山市治水記念館の表示では推定7.88mとしているが、6mから9.4mまで諸説がある²⁰⁾。死者は「福知山町洪水概要」²¹⁾によると福知山町全体で200人、当時の町人口6,140人²²⁾の3%に達する数である。そして水害後の明治30年には人口5,376人に減少した²³⁾。

「明治廿九年八月三十一日京都府天田郡福知山町水害全地図」²⁴⁾という資料が旧家に残されていて、家屋の被害や破壊箇所などが詳しく記載されている。それを現在の地形図に転記して第4図を作成した。この図を見ると

蛇ヶ端と広小路の破堤個所の西方に全壊・流失家屋が集中し、堤防を越流した洪水が自然堤防上に位置する市街地から、標高のより低い西方の後背湿地に向かって激しく流れ、被害を甚大にしたことがわかる。

2. 明治40年水害の概況

(1) 明治40年水害の経過

「明治40年惇明校水害紀要」には福知山町内の状況の記述はほとんどないので、「福知山町洪水概要」も参照して水害前後の経過を第2表にまとめた。

「福知山町洪水概要」によると、水害前日の8月25日午後2時頃から天気が一変して、雷を伴う豪雨になった。この経過から考えると、これは積乱雲の発達によるものであろう。『由良川改修史』では大雨の原因を前線、としている²⁵⁾。明治29年水害時と異なり支流土師川上流で降雨が多く、山地崩壊も頻発していた。26日午前4時頃に始まった堤防の決壊のころには、「ナイヤガラ」の瀑布を演出（「福知山町洪水概要」）する状況になった。兵隊と町の救助船が活動し、南方の高台の民家や施設に多くの避難民を収容した。町を横断した洪水流は29年と同じように、後背湿地で標高の低い西方の厚方面に向

第2表 明治40年水害時の経過

8月24日	午後から雨が断続的に降り続き、増水約5m 30cm。風はない。
25日	午前7時 雨が降り続き、低地では浸水が始まる。 9時頃 雨がいったん上がり、河川減水。 午後2時頃 天候一変、厚い雲に覆われる。 3時頃 雷を伴う豪雨。 8時 町役場は町長以下、書類片付け、堤防防御、工兵隊へ救助船依頼などにあたる。 11時頃 避難所に充てられた惇明小学校に避難者数百名。宿直教員は避難者と共に書類・物品を階上に避難(*)。
26日	午前1時 綾部より水位上昇中の電報があり、全町に急を告げる。 午前2時 惇明校では床上60cmまで浸水。(*) 4時頃 音無瀬橋一部流失、水位は堤防天端まで達し、すぐに常照寺裏堤防が決壊。町は船を町内に出し人命救助に当たる。 4時半過ぎ 上柳町、広小路、明覚寺裏、京口などの堤防が決壊。濁流が西方に流れ、茅屋を流す。 8時半 惇明校の宿直教員が、ご真影を救助船で避難させる。(*) 午後2時頃 別の教員が泳いで校内に入り点検、講堂で宿直。(*)
27日	午前5時頃 全く減水。惇明校に新たに3名の教員が出勤。(*)

「福知山町水害概要」、(*)は「明治40年惇明校水害紀要」による。

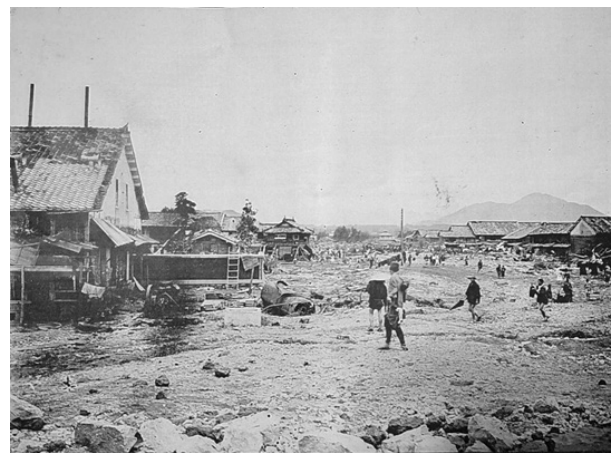
かい、家屋の残骸、家財道具などを流していった（第5図）。この水害による被害は、死者5名、馬溺死1頭、家屋流失151戸、全壊126戸、半潰42戸、床上浸水1354戸、道路流失埋没2か所約500m、道路破損5か所約300m、橋の流失1か所などがあげられている。

この時の洪水水位は福知山市治水記念館の表示によると8.48m²⁶⁾であった。明治29年水害に比べて水位が高かったにもかかわらず死者が少ないことについて山口加米之助(1972)は、29年の経験を踏まえて早めに避難していたことと、明治30年から福知山に移駐してきた陸軍工兵隊、歩兵隊が舟を使って救助活動をおこなったことを挙げている²⁷⁾。

惇明尋常高等小学校の被災状況を「明治40年惇明校水害紀要」で見ると、学校の被害は、床上約2.7m（時刻の記載なし）の浸水、北教室棟の東端1教室が「大破損使用に堪えず」、「校舎全部浸水のため壁剥離」、「窓ガラス、板戸の三分の一破損」「机、腰掛」は約7分の1が流失、その他、掛図、理科標本の多くが破損した。

当時の惇明校は尋常科が4学年で各学年3学級、計12学級、高等科が1学年で男女別に2学級、合計14学級があった。校長（明治29年水害時の主任教員）以下、14名の教職員が被災していた。教職員の全体数は不明だが、14学級を擁する学校であることから考えて、せいぜい20名程度であろうから、大半の教職員が被災したと考えられる。

また、福知山町の死者5名のうち1名は、惇明小学校の児童で貧しい母子家庭の9歳の女兒であった。「溺死



第5図 明治40年水害被災写真

「明治四十年八月廿七日水害翌日撮影、福知山町京口堤防決潰所ヨリ内記町流失跡ヲ望ム」と注記されている。建物が流され更地状態になっている。第4図の郡役所があった付近から西方を望んでいる（福知山市提供）。

報告」の項によると、家族3人で二階に避難し、水位の上昇に追われて押し入れの棚に逃れた女兒は家に流れ込む濁流に壁と共に流れの中に飛ばされ、屋根裏に逃れた母に紐で支えられていた祖母は力尽きて水中に没し、母親のみが辛うじて命を取り留めた、という悲惨な状況であった。

IV 水害後の学校復旧の経過

1. 明治29年水害後の惇明尋常小学校

「丙申水害実況」によって水害後の惇明尋常小学校の動きを見てみよう。

当時の町の行政は貧弱で、役場は洪水で倒壊した惇明校南校舎東端の一室にあったが流された（p. 52、『芦田恵之助国語教育全集1』のページ数、以下この節では同じ）。町長以下8名の陣容で救護、搜索、防疫などに昼夜奔走しても、町民の風当たりは強かったようである（p. 53～54）。そんな中で、「生存上に関係のうすき学校内の取片付けは更に顧られざりき」状況であった（p. 27）。惇明校では9名いた教員（p. 25～26）の内、1名は溺死、1名は洪水に流されて助かったが伝染病に侵され入院後病死した（p. 33～36）ので、7名の教員が残されていた。職員会議を開いて今後の対応を協議して、職員を二手に分け、一組はこの惨状を「慈善家」に訴える、もう一組は校内の復旧に尽力する、と決められた。芦田を含め2名は、惨状の訴えに京都に向い、5名の職員が開校準備にあたった（p. 27）。

芦田たちは9月13日に出発し、10月8日に帰るまでの23日間、京都市内では22の学校を訪れて、義捐を訴えたり、生徒に実況を話したりした。その間、惇明校は主任教員の中島氏を中心に（校長は8月に他校へ転出していた）復旧に努め、17日間の休校の後、授業を再開した（p. 27）。流失した校舎の再建については「丙申水害実況」には記述がないが、『惇明校二百年』によると、「明治30年には南教室の新築なり修繕もほぼ終えることができた」²⁸⁾。

「丙申水害実況」には、さまざまな支援活動も記されている。地元の天田郡教育協会という教員団体は、救急品や学用品を被災校へ届ける活動や義捐金の募集に尽力した（p. 76）。また、町の取り組みとして、被災者に9月1日から15日まで炊き出しが行われた（p. 70）。けが人や下痢症の患者が多く出たが、篤志の個人医の無料

診療が9月3日から、赤十字社無料診察が4日から開始された（p. 77、93）。京都市内の個人（複数）から義援の金品が寄せられたほか、隣村の婦人会は味噌汁を提供し、京都市内の薬屋の団体が薬品を寄贈、近隣の村の僧侶が世話をし、銭湯を無料開放した、などの支援があった（p. 78～80）。芦田は「われらはその恩恵によりて飢渴をしのぎ、夜寒を防ぐことを得たるのみならず、その厚き同情に励まされて勇氣常に倍し、疲労も打ち忘れて昼夜復旧の事を勉めたり」（p. 75）と述べている。

この後、惇明尋常小学校は明治36年に第4図のAの位置へ校舎を移転し、40年には高等科を設置して「惇明尋常高等小学校」と改名した。また、校舎を流失した天田郡中部高等小学校は31年に第4図のBの位置に移転した²⁹⁾。

2. 明治40年水害後の惇明尋常高等小学校

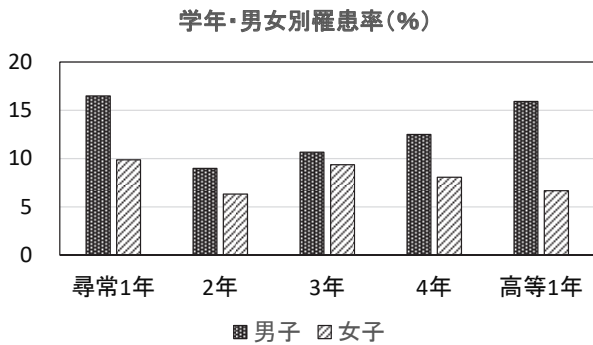
「明治40年惇明校水害紀要」と「福知山町洪水概要」によって水害から授業再開までの動きと福知山町の行政の復旧の経過と合わせてまとめると第3表ようになる。

明治29年の水害の時には、町の行政の力はまだ弱く、「丙申水害実況」が述べるように、学校の復旧は生存上に関係がうすい、として目が向けられない状況であった。それに比べ、明治40年の水害後は行政の支援が格段に行き届き、校舎の再建計画や片付け要員の手配に町と学校が緊密に連携をとっていることが読み取れる。また、町の被災者支援業務に教員が応援に駆け付けていたことがわかる。

学校の児童の生活、健康への配慮が見られる。9月30日、健康診断が行われ、「明治40年惇明校水害紀要」にはそのまとめが綴じられている。在籍831人のうち欠席が97名あった中、病気があると診断された児童が実数で77名いた。症状別では消化器系33名、呼吸器系42名、その他9名（ともに延べ数）が挙げられている。学年・男女別の罹患率のグラフ（第6図）を見ると、1割余りの児童が何らかの症状を持ち、特に年齢の低い尋常1年生の児童にその数が多い。水害後の劣悪な生活環境が幼い児童に影響したのだろう。男子の罹患率が全体の12.5%、女子が7.5%で男子の罹患率が高いが、この理由は不明である。また、高等科男子の罹患率が尋常1年男子と同じくらい高い理由もはっきりしない。次に述べる出席統計では、被災後、日を追うにつれ欠席者は減っていくが、高等科男子児童に限って検診当日の欠席者が

第3表 明治40年水害時の惇明尋常高等小学校と福知山町の明治40年水害の復旧経過

	惇明尋常高等小学校 「明治40年8月水害日誌」による	福知山町 「福知山町洪水概要」による
8月27日	晴。3名の教員が出勤。近隣の村の小学校長および青年団員17名と共に校内の片づけを始めた。近隣校校長等8人の見舞い。	午前5時全く減水。町長以下14名で帳簿整理、炊事、調査、人夫取り締まり等の任務を分担。町と郡役所共同で炊き出しが始まり、「臨時救助仮小屋」を建設。
28日	曇晴。5名の教員と20人の人夫、午後には4名の中学校(旧制府立第三中学校、大正7年に福知山中学校と改称)の教員の応援もあって校内の片づけ、清掃。	「臨時救助仮小屋」を一か所増設した。給与切符を各字(あさ)の代表を通じて配布。傷病者の療養救護方法に着手。倒家調査開始。救護米の調達に策尽きる。
29日	晴、午後にはわか雨。4名の教員と20名の人夫で校内の片づけ、午後には中学校から3名の応援あり。	救助米について「貴地の相場で買い取る」と隣村に連絡。「街路取片付夫」69名を雇い入れる。赤十字社救護所を中部高等小学校に設置し各字総代に通知。
30日	晴。4名の教員と15人の人夫で校舎整頓。	「塵芥取捨場」3か所設置を決定。
31日	雨。9月1日より授業停止を協議。午後、中島校長(29年水害当時の主任教員)が出張先から帰校。善後策を町長と打ち合わせ。	赤十字社の救護所を惇明尋常高等小学校内へ移転。
9月1日	晴。校長以下6名の教員と人夫2名で洗浄作業。	炊き出し期間を一週間延期と決定。
2日	雨。全職員で床上の洗浄。午後職員会議、以後2週間の休校を決定。溺死児童の家庭訪問を校長と学級担任で行った。	避難所・在宅の赤痢、疑似コレラ患者が発生し町民は不安になる。「奈良市養院」から罹災者50名収容するとの申し出(結果は不明)。
3日	晴。教室の机椅子の点検。午後、戸障子の点検、校外に出て流失物を捜索。	町内に湯沸場を5か所設置。
4日	晴、午後夕立。15名の人夫で職員室、教室の備品を掃除。学校周辺の掃除。	小学校の復旧工事の設計書作成を町会で確認。府令罹災救助基法施行規則により罹災者の戸籍にもとづき被害調査に着手。戸籍簿と居住の実態が異なる場合も多く、徴税簿の調査、本人呼び出しなど手立てを尽くしていく方針を決める。
5日	晴、午後夕立。職員一同応急復旧作業。人夫3名、玄関廊下掃除、生垣修繕準備。教員の一人は町役場へ事務手伝いに出向(町役場の被災者援助事務が煩雑・多忙化のため)。	湯沸場5カ所を10カ所に増設。
6日	晴、午後夕立。校舎復旧工事計画書を業者に作成させた。人夫3名。各職員は応急町事務を取る。	府知事が水害状況を視察。工兵隊が電話線を架設。
7日	雨。校舎復旧請負契約が締結され、直ちに工事に着手。人夫2名で教授用具の掃除。以後、職員半数が毎日町役場へ出向して応急事務の手伝いに従事。	惇明尋常高等小学校の復旧工事請負業者決定。警察署長及び郡書記と汚物取り除き、井戸浚えの件で打ち合わせ。
8日	晴、午後暴風。備品と書籍の整頓。	昨日来の雨はやんだが、警報もあり人心は不安。
9日	朝から雨で水量増加、午後4時に水位4.2m。避難する者が多く、本校にも数名あった。	午前1時頃から豪雨と暴風が来襲。4時頃に高所にある避難小屋が暴風で倒壊。床下浸水も数十戸発生、避難する者は後を絶たず。午前5時頃、激しい落雷。午後4時、増水約4.2m。午後8時頃に雨は小康、減水が始まり事なきを得た。
10日	晴。京都府衛生会が本校で診察開始。溺死児童の家庭に見舞いとして米2升を贈る。	雨は10時には止む。赤痢、コレラ患者が11名発生。雨や過酷な作業、伝染病の発生等で作業員が不足。復旧作業の遅れを危惧。寄贈品を各字の代表者に分配。
11日	雨。校長は町役場、郡役所、中部高等小学校へ。	(雨、の一字のみ)
12日	快晴。府の視学官が水害状況視察	各字総代を集めて寄贈品の分配。汚物取り除きの請負業者とその方法を協議。
13日	晴。府衛生会事務所引き上げ。	各字総代を集めて寄贈品の分配。
14日	晴。町長が校舎工事視察。	炊き出し終了。各字総代を集めて寄贈品の分配。
15日	晴。町学務委員が工事視察。	各字総代を集めて寄贈品の分配。
16日	晴。校長が寄付の分配方法で郡役所と協議。	各字総代を集めて寄贈品の分配。
17日	晴。4名の教員と15人の人夫で校舎整頓。校長は午前中、児童保護者の状況視察。	町会開催
18日	雨風。校長は町役場、郡役所、中部高等小学校へ。	各字総代を集めて寄贈品の分配。
19日	晴。教授用具購入のため教員一人が綾部へ出張。講堂と教授用具の整頓。	各字総代を集めて寄贈品の分配。
20日	曇。児童保護者歩合調査、校長が教育方針説明、教科用図書・参考書の調査、各学年へ寄贈品の分配。	各字総代を集めて寄贈品の分配。町会で善後策を協議。赤十字社救護所閉鎖。
21日	雨。校舎復旧工事はほとんど終了。授業開始。	(以下、記載なし)

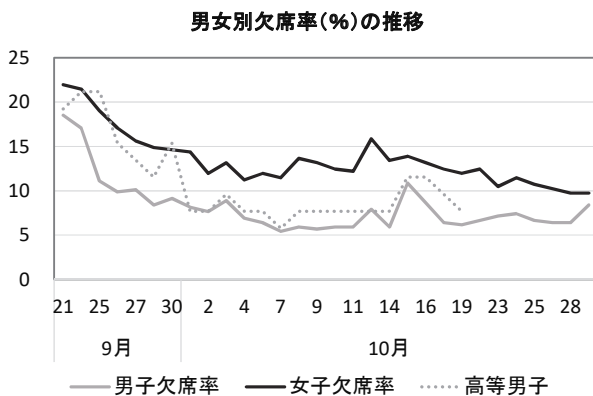


第6図 明治40年水害後の児童罹患率(単位は%)
 (「明治四十年八月九月 惇明尋常高等小学校水害紀要」中の「惇明尋常高等小学校児童水害後健康診断一覧表」による。)

増えていることと何か関係があるかもしれない。

症状別の割合をみると、消化器系が50%、呼吸器系が約40%、その他神経系などが約10%となっている。ここから水害後の劣悪な衛生環境が推測される。つまり、水害によって家屋・家財・糞便・衣類等あらゆるものが流され、その残渣が細かい泥となって町内に堆積し、乾けば埃となって飛散する。これが呼吸器に影響を与える。また、井戸水に頼る飲料水では、町内各所に湯沸かし場が設置されたり井戸替えが進められたりしたとはいえ、清潔な食事が難しい。これが下痢症をはじめ消化器疾患につながる。このような状況が健康診断結果に表れたのであろう。

9月21日の授業再開後、30日間の出席統計も綴じられている。それによって30日間の欠席率の推移をグラフにした(第7図)。これを見ると男女で欠席率に差があるのが明らかである。この期間での平均欠席率は、男子が約8%に対して女子は約13%であり、女子の欠席者が多い。9月30日の健康調査の結果の男子罹患率



第7図 明治40年水害後、児童の欠席率の推移(単位は%)
 (「明治40年惇明校水害紀要」中の「惇明尋常高等小学校水害後の開校三十日間児童出席一覧表」による。)

12.5%、女子8.5%の数字とは逆になっている。したがって、病気のために女子の欠席率が上がったとは考えにくい。家庭において水害後の後片付けの労働力を多くの女子児童が担わされた結果ではないだろうか。

また、出席統計をみると、この30日間で、25名もの「退学」、6名の「入学」があった。(「退学」は転出、「入学」は転入と考えられる。)児童数が19名減少した。明治29年の水害後、約12%の人口減少があったが、児童数の減少から明治40年水害後も住民の流出があったことがうかがえる。

V おわりに

福知山では記録が残る江戸時代以来、数年に一度洪水に襲われ被害を出してきた。その中で明治に入ってから設置された公立の学校が被災した場合、行政はどのように復旧にかかわってきたのか、あるいは教職員はどのように動いたか、小学校教員が記録した稿本によって学校が受けた災害とともに、その経過を紹介した。

本論で紹介したのは福知山市の学校の二つの史料であるが、被災を記録した史料は特別に編まれたものや学校日誌に記されたものなどがまだ多く残っているはずである。さまざまな学校にある被災の記録を、年代的・地域的に広く収集・検討して、被害状況と復旧・復興の経過から教訓を引き出していくことが今後の課題である。

【謝辞】

惇明小学校所蔵資料の閲覧について前校長の芦田昌雄先生、現校長の中川敏朗先生、福知山市役所所蔵の資料の閲覧について市文化スポーツ振興課長の西村正芳氏、「明治廿九年八月三十一日京都府天田郡福知山町水害全地図」の閲覧について、前「日本の鬼の交流博物館」館長の塩見行雄氏、上賀茂小学校『水禍』の閲覧に当たっては複製版を製作された久保田真由美氏、の皆様のお世話になった。また木谷幹一氏には素稿を読んで様々なコメントをいただき、各種文献をご教示いただいた。さらに前記の西村課長には多くの有益なご意見をいただいた。査読者と編集委員会の皆様には不十分な素稿に的確なコメントをいただいで、本論は大きく改善できた。以上の皆様に感謝いたします。

注

- 1) 惇明同窓会開学二百年祭実行委員会編『惇明校二百年』、惇明同窓会、2011、42頁。なお、同じ内容が惇明小学校ウェブサイト「惇明小学校のあゆみ」のページ http://www.kyoto-be.ne.jp/junmei-es/cms/?page_id=128 で見られる(2021年11月8日現在)。
- 2) 上賀茂尋常高等小学校の『あほひ特別号 水禍』は、復刻されて上賀茂学区社会福祉協議会編『防災紙芝居「水禍」：みずのわざわい：昭和10年『京都大水害』資料集』2013年、16～88頁に収録されている。
- 3) 高内末男編『甲南高等女学校 水禍記念誌』、甲南高等女学校、1938年、234頁。
- 4) 甲南高等学校々友会編纂『阪神地方水害記念帳』、甲南高等女学校、1938年、72頁。同書は甲南大学阪神大震災調査委員会編『阪神地方水害記念帳復刻版』、神戸新聞総合出版センター、1996年、90頁、に収録されている。
- 5) 芦田完「福知山地方の自然災害史—洪水編—」、建設省近畿地方建設局福知山工事事務所、1978年、43頁。
- 6) 由良川改修史編集部編『由良川改修史』、建設省福知山工事事務所、1980年、125-130頁。
- 7) 福知山市史編纂委員会『福知山市史第四巻』、1992年、419-437頁。
- 8) 小滝篤夫「由良川中流部の水害史と地形・地質から考える防災・減災」、京都歴史災害研究、第19号、2018年、25-37頁。
- 9) 西村正芳「第4章治水と水害」、福知山市地域振興部文化・スポーツ振興課編『福知山の治水とまちづくり』、2019年、43-58頁。
- 10) 芦田恵之助『芦田恵之助国語教育全集1 明治期実践編』、明治図書、1988年、702-703頁。
- 11) 北川健次「芦田恵之助における随意選題思想形成過程に関する研究—明治期の芦田の綴り方実践と思索に着目して—」、武庫川女子大学博士論文、2017年、32-33頁。
- 12) 前掲10)の701頁。
- 13) 芦田恵之助「丙申水害実況」は前掲10)の15-95頁に掲載されている。
- 14) 2冊のうち1冊は、「御真影及勅語ノ始末」以下、「水災被害調査」(全町と在籍児童家庭別)、「溺死報告」(在籍児童について)、「職員被害ノ状況」、「学校被害取調」、「水災被害調査」(全町)、「惇明尋常高等小学校水害調査票」(項目別に被害金額)、「惇明尋常高等小学校児童水害後健康診断一覧表」、「明治四十年八月水害日誌」、「惇明尋常高等小学校水害後の開校三十日間児童出席一覧表」、「惇明尋常高等小学校水害後開校三十日間出席児童数表」、「水害後開校三十日間児童出席状況一覧表(控)」の順に罫紙27枚が綴じられている。もう一冊は出席統計等がなく、罫紙19枚のやや省略されたものであるが、「明治四十年八月水害日誌」などの内容は同一である。
- 15) 小瀧義雄「第一 仁王門再建計画の由来」、稿本「仁王門再建並に御本尊開扉供養に関する記録」、補陀洛山観音寺、1935年、1-2頁。
- 16) 肥後寛一「台風の古い日本名」、天気、7、1960年、20-21頁。
- 17) 連隊区司令部は徴兵、召集等の事務機関。
- 18) 高橋忠久「惇明館と惇明校高等小学校の校舎の変遷(其の一)」、史談ふくち山、No.492、1993年、6頁。
- 19) 惇明小学校本館(国登録有形文化財、昭和12年竣工)の2階講堂に「先亡職員児童之霊」、「先亡職員児童追悼之標」と書かれた木製の碑が保管されている。職員と児童に犠牲者が出た災害は明治29年水害だけなので、その慰霊碑の可能性はあるが、断定できない。
- 20) 福知山市役所に保管されている「水害記録」と題する綴り中の「由良川筋量水標最大水位観測表」では31尺=約9.4m、前掲9)の『福知山の治水とまちづくり』(52頁)では6～6.6m、としている。なお、「水害記録」は1970年代に始まった市史編纂のために収集された資料の綴りである。
- 21) 「水害記録」の中に綴じられた手書きの文書である。延宝8年から昭和5年までの水害を記録している。「京都府天田郡役所」の罫紙に書かれている。『福知山市史第四巻』421頁によると、町役場から郡役所への報告文書であるという。
- 22) 山口加米之助『福知山の水防今昔』、竹毛文庫、1972年、6頁。山口が1943年に体験をつづった稿本を、根本惟明が編集して出版したもの。
- 23) 前掲7)『福知山市史第四巻』の421頁。
- 24) 「明治廿九年八月三十一日京都府天田郡福知山町水害全地図」の製作時期は明らかでない。福知山市字堀の吉田二三雄氏所蔵だが、現状では原本の閲覧は不可能で、塩見行雄氏の原本コピーを閲覧した。
- 25) 前掲6)の116頁。
- 26) 「由良川筋量水標最大水位観測表」では35尺=約10.6mとしている。
- 27) 前掲22)の12頁。
- 28) 前掲1)の44頁。
- 29) 前掲18)の3-9頁。